

著明な鎖骨角状変形を伴う先天性筋性斜頸

西山正紀¹⁾・山田 総平¹⁾・中野 祥子²⁾

西村 淑子²⁾・二井 英二²⁾

1) 国立病院機構三重病院 整形外科

2) 三重県立子ども心身発達医療センター 整形外科

要 旨 手術を施行した筋性斜頸において、鎖骨の肥厚、骨棘、角状変形など変形の推移とその特徴、随伴症状について検討した。2006～2014年に初回手術を行った7例、男児4例、女児3例を対象とした。手術時年齢は、平均4歳8か月、経過観察期間は平均3年3か月である。術前の鎖骨変形は、全症例に鎖骨枝起始部の肥大を認め、3例が骨棘形成のみを伴い、3例に鎖骨枝起始部を頂点とした著明な角状変形を認め、そのうちの1例は、胸鎖関節亜脱臼を、2例は骨棘も伴っていた。これら鎖骨変形は術後に改善し、手術時8歳11か月の症例で軽度の変形を残し、手術時6歳1か月の症例で、随伴症状残存として、片側交差咬合、顔面非対称を認めている。鎖骨変形は重症度を反映し、著明な鎖骨角状変形を来したものは、臨床上重度の斜頸で、早期手術が望ましい。

はじめに

手術を施行した筋性斜頸において、鎖骨の肥厚、骨棘、角状変形など鎖骨変形の推移とその特徴、随伴症状について検討したので報告する。

対象および方法

2006～2014年までに筋性斜頸に対し、初回手術を行った7例、男児4例、女児3例を対象とした。手術時年齢、平均4歳8か月(3歳1か月～8歳11か月)、経過観察期間、平均3年3か月(3か月～8年4か月)である。術前術後の鎖骨の変形を中心とした形態変化と随伴症状の変化を検討した。X線撮影方法は、頸椎撮影条件で鎖骨を含めた撮影として、鎖骨変形の程度に応じて、術後は約2～3か月間隔で行った。手術法は、胸鎖乳突筋下端部分切除を基本に、可動域制限が高度な場合と学童期周辺以降の年長児には、上端切離を追加した。5例が胸鎖乳突筋下端部分切除術で、

2例が胸鎖乳突筋下端部分切除と上端切離術であった。

結 果

全症例に鎖骨枝起始部の肥大を認め、3例が骨棘形成のみを伴い、3例に鎖骨枝起始部を頂点とした著明な角状変形を認め、そのうちの1例は胸鎖関節亜脱臼を、2例は骨棘も伴っていた。骨棘形成を認めたものは、7例中5例であった。これら鎖骨変形は、術後6か月以内にほぼ改善し、手術時8歳11か月の1例で軽度の変形を残しているのみである。頸部可動域制限は全例改善し、随伴症状残存としては、手術時6歳1か月の1例で、片側交差咬合、顔面非対称を認めている。著明な鎖骨角状変形を伴った3症例を供覧する。

症例1：3歳1か月、女児。左筋性斜頸で、鎖骨枝の緊張が強く、左胸鎖関節に動揺性が見られた。頸部は右側屈0°、左回旋45°と強く制限され、顔面非対称、左肩の挙上制限を認めた。

Key words : congenital muscular torticollis(先天性筋性斜頸), angular deformity of clavicle(鎖骨角状変形)

連絡先 : 〒 514-0125 三重県津市大里窪田町 357 国立病院機構三重病院 整形外科 西山正紀 電話(059)232-2531

受付日 : 2017年1月1日

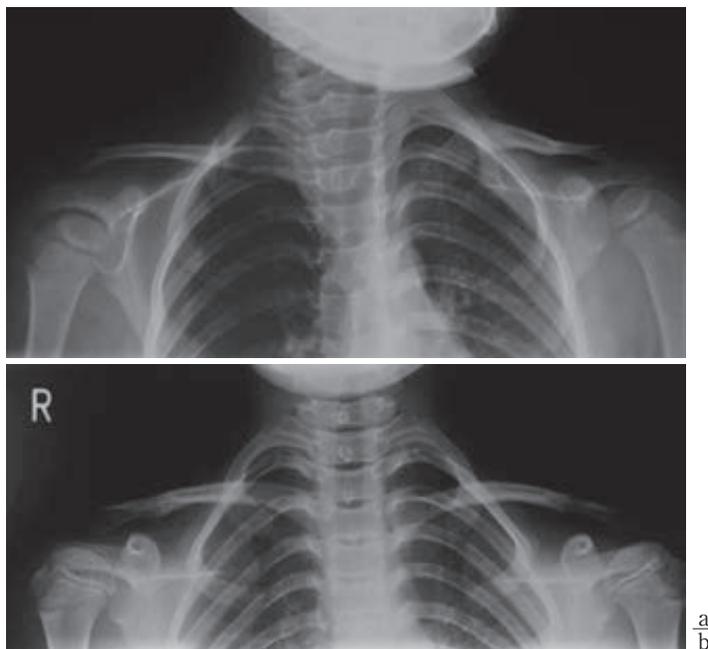


図 1. 症例 1, 左筋性斜頸 X 線像
a: 術前 3 歳 1 か月時, 左鎖骨の骨棘と角状変形, 左胸鎖関節脱臼を認める.
b: 術後 8 歳 5 か月時, 鎖骨, 胸鎖関節は左右対称である.

X 線像では, 左鎖骨の骨棘, 角状変形, 左胸鎖関節亜脱臼がみられた(図 1-a).

手術は下端部分切除を行い, 骨棘は切除していない. 術後 3 か月で骨棘は消失して, 変形は改善傾向で, 8 歳 5 か月時, 鎖骨, 胸鎖関節(図 1-b), 顔面は左右対称であり, 臨床上問題は見られない.

症例 2: 6 歳 1 か月, 女児. 右筋性斜頸で, 鎖骨枝の緊張が強く, 頸部は左側屈 10°, 右回旋 45°と強く制限され, 顔面非対称, 頭部変形も顕著であった.

X 線像では, 右鎖骨の骨棘, 角状変形が高度である(図 2-a).

手術は上端切離術と下端部分切除術を行った. 7 歳 8 か月時, 鎖骨は左右対称である(図 2-b). しかし, 顔面非対称と右交差咬合(図 2-c), が残存しており, 矯正歯科にて矯正装置による保定が予定されている.

症例 3: 8 歳 11 か月, 男児. 右筋性斜頸で, 鎖骨枝の緊張が強く, 頸部は左側屈 20°, 右回旋 60°と強く制限され, 顔面非対称もみられた.

X 線像では, 右鎖骨角状変形が高度である(図 3-a).

手術は上端切離術と下端部分切除術を行った. 術後, 鎖骨変形は徐々に改善した. しかし, 12 歳 2 か月時, 顔面非対称は改善したが, 右鎖骨変形は軽度残存した(図 3-b).

考 察

先天性筋性斜頸において, 胸鎖乳突筋鎖骨枝の癒着化が強いと, 牽引力により鎖骨の変形が生じ得る. 鎖骨変形は, 肥大だけでなく, 骨棘や角状変形を生じるものと思われる. 重度であれば, 鎖骨変形のみならず, 顔面非対称, 咬合障害, 肩関節運動障害などを伴った. 笠井は, 手術例 150 例の約 92%に鎖骨の肥大を認めたと報告した¹⁾. 我々の手術症例でも全例肥大を生じており, さらに重度となると, 骨棘や鎖骨角状変形を伴っていた. 筋性斜頸における骨棘形成の記載は, Middleton らの報告にみられ, 胸鎖乳突筋鎖骨枝の起始部に連続的な小外傷が発生することで骨棘が形

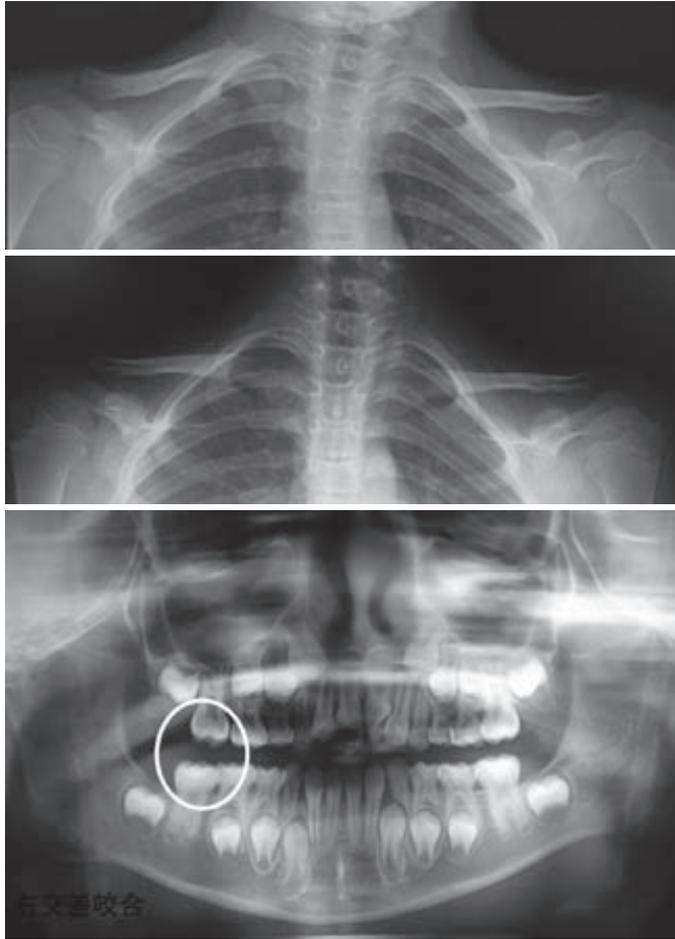


図 2. 症例 2, 右筋性斜頸 X 線像

- a: 術前 6 歳 1 か月時, 右鎖骨の骨棘と角状変形が高度である.
 b: 術後 7 歳 8 か月時, 鎖骨は左右対称に修復されている.
 c: 7 歳 10 か月時, 右交差咬合を認める.

a
b
c

成されると述べられている²⁾³⁾⁵⁾. これが重度となると角状変形に至ると思われる.

我々は、著明な角状変形を来した重症例を 3 例認めており、鎖骨の変形は重症度を反映すると考えた. 手術時 3 歳 1 か月で早期対応の症例 1 は、胸鎖関節脱臼も併発していたが、術後速やかに回復した. 年長の 6 歳 1 か月の症例 2 で鎖骨は正常に復したが、交差咬合と顔面非対称が残存した. さらに、手術時年齢の遅い 8 歳 11 か月の症例 3 では、鎖骨の変形残存を認めた.

鎖骨角状変形を認める症例は、頸部可動域制限など臨床症状が強く、顔面非対称、胸鎖関節脱臼、交差咬合⁶⁾など骨格変形を伴っていて重度であっ

た. 手術時年齢が高くなると、鎖骨やその他の随伴症状の自然修正は困難である. 鎖骨角状変形を認める場合は、早期の手術が望ましいと考える⁴⁾.

まとめ

鎖骨変形は重症度を反映し、著明な鎖骨角状変形を来したものは、臨床重度の斜頸であり、早期手術が望ましい.

文献

- 1) 笠井実人：筋性斜頸における鎖骨の肥大, 変形, 整形外科 28 : 801-804, 1977.
- 2) Middleton DS : Pathology of congenital

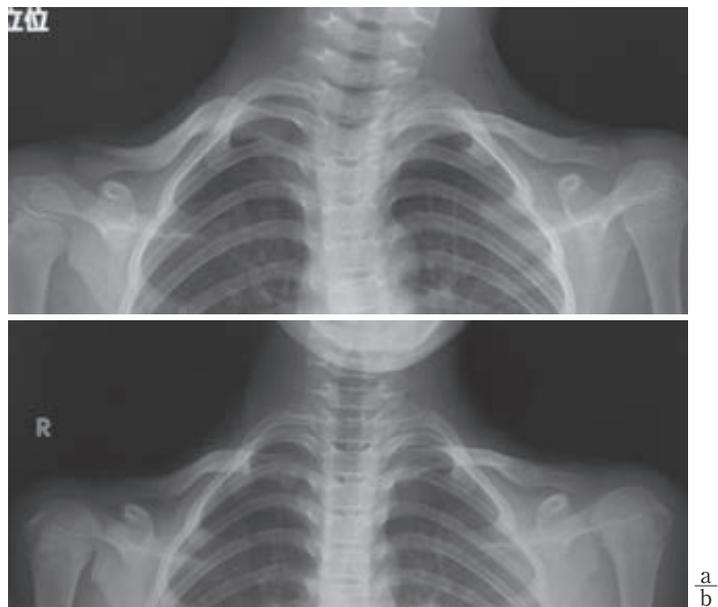


図3. 症例3, 右筋性斜頸 X線像

- a : 術前 8 歳 11 か月時, 右鎖骨の角状変形が高度である.
b : 12 歳 2 か月時, 右鎖骨変形は軽度残存している.

torticollis. Br J Surg 18 : 188, 1930.

- 3) 皆川 寛, 三谷 茂, 遠藤裕介ほか : Traction spur を生じていた 14 歳の筋性斜頸の 1 例. 日小整会誌 18 : 36-39, 2009.
- 4) 中川敬介, 北野利夫, 今井祐記ほか : 先天性筋性斜頸による顔面非対称性のインスタント写真を用いた評価. 日小整会誌 16 : 114-117, 2007.
- 5) 西山正紀, 中野祥子, 二井英二ほか : 鎖骨に traction spur と角状変形, 胸鎖関節亜脱臼を来した 2 歳の筋性斜頸の 1 例. 臨整外 45 : 865-869, 2010.
- 6) 薄井陽平, 山田一尋 : 筋性斜頸による顔面非対称と上顎骨劣成長を伴う両側側方歯部交差咬合症例. 甲北信越矯正歯科学会雑誌 21 : 19-27, 2013.